

5年間の発掘調査成果

群馬県教育委員会文化財保護課 橋本 淳

はじめに

史跡上野国分寺跡は、群馬県高崎市東国分町・引間町、前橋市元総社町にまたがって所在する。天平13年(741)の聖武天皇の詔によって、国ごとにつくられた国分寺の一つである。寺域が地割としてよく整い、2基の土壇や礎石が残存するとして、大正15年(1926)10月20日に62,092m²が国史跡に指定された。

昭和55~63年度にかけて史跡整備に伴う発掘調査が実施され、塔や金堂(現在は講堂に修正、以下、金堂(現講堂)という)、南大門、東大門、南辺築垣が確認された。中門、回廊は確認されなかったが、他国の例を参考に想像図が描かれた。そして、その調査成果に基づき、平成2~5年度にかけて塔と金堂(現講堂)の基壇、南辺築垣の一部が復元されている(第1期)。

一時、整備事業は中断していたが、群馬県教育委員会では平成24年度から史跡整備事業を再開し、整備のための基礎情報を得るために、平成24~28年度の5か年にわたる発掘調査を実施した(第2期)。今回の調査では、これまで不明であった中門、回廊の位置が初めて確認されたほか、100年近くにわたって金堂とされてきた建物跡の前面で本来の金堂跡が発見されるなど、これまで想像されてきた上野国分寺の姿を大きく塗り替える成果があがっている。その概要を報告したい。

1. 発掘調査成果の概要

(1)中門 これまで想定されていた位置より30mほど南で、掘り込み地業(地盤を強化するために版築を施す基礎地業)を確認した。規模は東西約15m(50尺)、南北約12m(40尺)を測る。上部が削平されているため根石(礎石の下に敷く石組)等は確認できなかったが、中門の中央を壊して掘られた後世の堀の斜面に落ち込む礎石2個を確認した。掘り込み地業の規模から、中門は八脚門(正面3間の門)であったと推定している。

(2)回廊 部分的ではあるが、東西南北の4面すべての掘り込み地業を確認した。特に南東部はもっとも残りがよく中門から東に25mほど伸び、さらに北へ直角に折れ曲がって伸びる版築層と、その上面に逆L字状に並ぶ根石列を確認した。根石は内側柱列にあたるもので、それぞれ約3m(10尺)間隔で配置されており、桁行が10尺等間であることが分かった。また、西面回廊で外側柱列の根石列が検出され、図上復元での位置から推察すると梁行15尺の単廊の可能性が高いと考えられる。また、回廊外縁に沿うように、版築を壊して形成された瓦廃棄層が見つかっている。土層中からは大量の瓦が出土することから、回廊倒壊後に落下した瓦を埋めて整地し直した跡と考えられるが、その土層上位に浅間Bテフラ(1108年降下)の堆積が認められる。さらに、1030年に作成された「上野国交替実録帳」には、中門と回廊が無くなっているとの記載が見られないことから、回廊は1030年~1108年の間に倒壊したことが明らかとなった。また、塔の東側の位置で北面回廊を確認した。これ以北では回廊の痕跡が確認できないことから、回廊は金堂(現講堂)基壇には伸びていかないと考えられた。と同時に、北面回廊の先に本来の金堂が存在することを示唆した。

(3)金堂 金堂(現講堂)基壇の前面、塔の東側の位置で、本来の金堂の北東角にあたる掘り込み地業を発見した。見つかった範囲は東西12m、南北13mほどだが、東縁から25mほど西側の調査区でも北縁部分が確認されている。かなり削平を受けているため、確認された掘り込みは15cmほどとあまり深くはないが、硬く明瞭な版築層が確認できた。版築土中からの瓦の出土は皆無で



史跡上野国分寺跡の位置 (s=1/200,000)

あり、創建期でも早い時期に造営されたと判断される。掘り込み地業の規模は、伽藍中軸線と塔との心々線で折り返すことにより、東西 28.5 m、南北 19 m ほどと推定される。講堂よりもやや小さい規模である。また、南西部では耕作の邪魔になるため穴を掘って落とし込まれたと考えられる礎石 1 個を再確認した。

(4) 経蔵・鐘楼 第 1 期調査で確認されていた掘立柱建物 SB08 (第 1 期調査では性格不明とされていた) を、経蔵ないし鐘楼と想定して再調査を行った。SB08 は 3 間 × 2 間の南北棟の建物である。西面回廊の北延長線上にあり、新たな金堂が発見されたことで、金堂と講堂の中間の位置にあたることとなった。調査の結果、SB08 と同じ位置で新たに掘り込み地業を確認した。SB08 の柱穴が版築を掘り込んでいることから、基壇建物から掘立柱建物へと建て替えられたことが分かる。掘り込み地業の規模から基壇建物は 10 尺等間ほどの規模が推定でき、SB08 は 7 尺等間であることから、規模を縮小して建て替えている。経蔵・鐘楼が東西対に配置される例が多いが、掘立柱への建て替えに際し、梵鐘の重量に耐えられるよう柱間を狭めた可能性があるため、西側が鐘楼だったと考えている。

(5) 僧坊 講堂の北側に僧坊が位置すると想定して調査を行ったが、後世の削平が著しく関連する遺構は確認できなかった。しかし、第 1 期調査で確認されていた柱穴列 (SA01) を再確認した。東西方向の一本柱列であることから、



上空から見た主要伽藍地区（上が北）

西に塔、北に金堂として復元された基壇がある。その金堂（現講堂）基壇の前面、塔と並ぶ位置で本来の金堂が見つかった。その西の調査区では、南から伸びる西面回廊が塔の東で屈曲し、金堂へと向かっている。

目隠し塀のような構造物と考えられる。僧坊の痕跡は確認できなかったが、現時点ではこの SA01 と講堂との間に僧坊があったと考えている。

(6)南大門 第1期調査で確認されていた東辺の礎石3個を再確認するとともに、後世の堀斜面にずり落ちた礎石2個を新たに発見した。第1期調査では南大門は八脚門と推定されたが、今回の調査で伽藍造営の基準線となった伽藍中軸線が判明し、その伽藍中軸線で礎石列を折り返すと八脚門では柱間が開き過ぎてしまうことから、5間門(正面5間の門)であった可能性が高くなった。

(7)築垣 南辺部の調査で築垣を確認するとともに、築垣の版築層下から掘立柱塀の柱穴列、また築垣北縁を壊して掘られた大溝(SD27)を検出した。築垣が壊れた後にSD27を掘り、その排土を築垣残部に盛り上げて土壘状にしていたようである。これにより南辺部は、掘立柱塀→築垣→土壘+大溝と変遷したことが推定される。

(8)寺域南東部 寺域南東部では、地表下1m程の深さで浅間Bテフラの混土層が確認された。このことから寺域南東部は、国分寺当時から浅い谷地であったことが分かった。

2. 寺域と伽藍配置

寺域は史跡の指定理由にあるとおり、地割としてよく残っている。東・西・北辺は現道がその名残と考えられる。寺域を設定するにあたっては講堂の中心を基準点としているようで、北辺は講堂の中心から108m(360尺:1町)、南辺は南大門の中心が講堂の中心から123m(410尺:1町+50尺)、合わせると南北長は231m(770尺:2町+50尺)となる。東辺については東大門の礎石を中心と考えると、講堂中心から111m(370尺:1町+10尺)、西辺は108m(360尺:1町)となり、合わせて東西長219m(730尺:2町+10尺)となる。

上野国分寺の伽藍配置は塔が回廊の外に置かれる興福寺式であるが、塔と金堂が中心をそろえて東西に並んで建つという特徴的な伽藍配置となる。同様の伽藍配置をもつ国分寺はあまり多くないが、陸奥、近江、但馬で見られる。



回廊南東部の根石列(北から)



落とし込まれた金堂の礎石(南から)
直径約130cmの大きな石。金堂の推定範囲内から見つかった。

おわりに

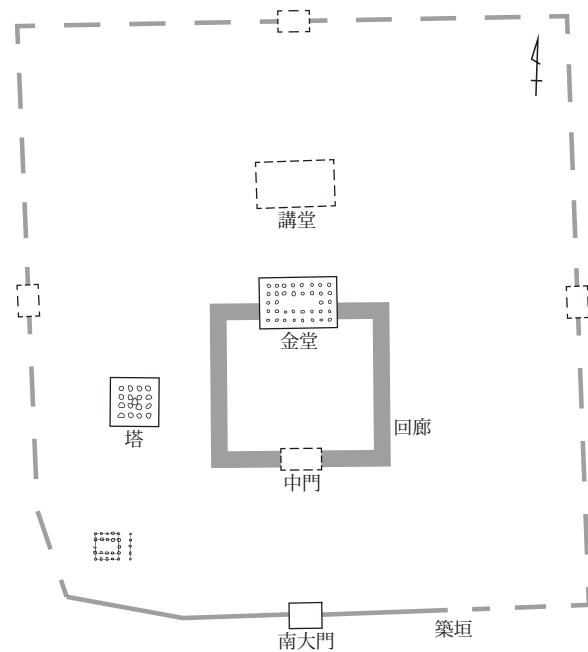
平成24年度から始まった第2期調査によって、従来考えられてきた上野国分寺の姿が大きく替わることになった。この調査成果をもとに、これから上野国分寺の新たな研究が始まることになる。また、今回の調査は史跡整備に伴うものであるため、今後は整備に向けて舵を切っていくこととなる。史跡上野国分寺跡の価値や魅力を、最大限に伝えられるような整備を模索していきたい。



鐘楼と考えられる建物跡(南から)
人が立っているところが柱穴の位置。北半の黒く見える土は、基壇建物の掘り込み地業。

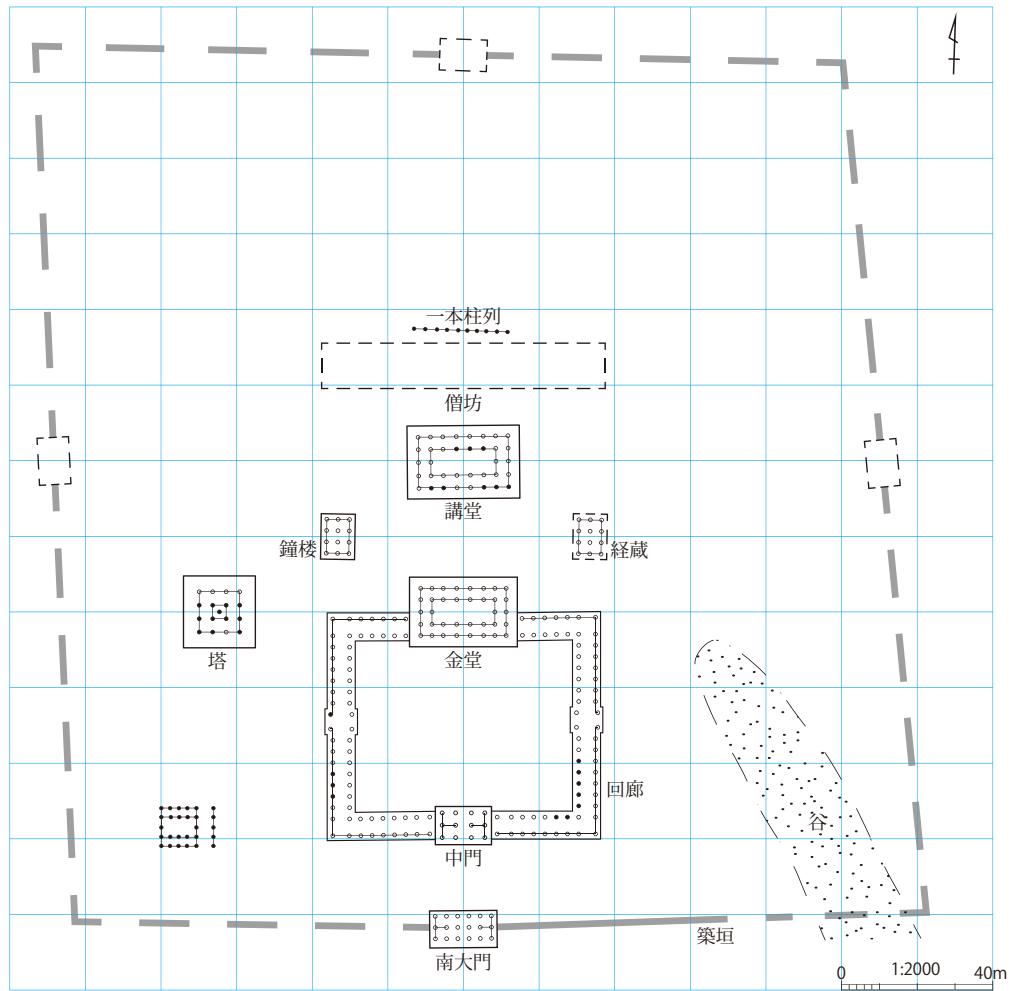


寺域全景 (上が北)



第2期調査以前の伽藍配置

※右上・下の実測図は伽藍中軸線を垂直にしているため、北に
対して2°東に振れている。



上野国分寺最新の伽藍配置